

## 高山善吉翁遺稿集 (二)

## 高山善吉

(故賛助会員 佐伯市渡町)

## 『佐伯の歴史と文化』

No. 一七 佐伯文庫と四教堂

佐伯藩は藩祖毛利高政公が佐伯二万石に移封された慶長六年(一六〇一)から、版籍奉還後の廢藩置県で明治四年(一八七〇)まで約二七〇年続いた。

六代藩主高慶が藩地にはじめて入部した元禄十四年(一七〇一)までの一〇〇年間、二代高成は佐伯、三代高尚・四代高久は江戸藩邸で、いずれも病弱短命で二、三〇代で死亡または隠退している。

六代高慶・七代高丘・八代高標までの一〇〇年は佐伯藩全盛の時代であり、わが藩政が組織・制度とも整備され、藩校四教堂や佐伯文庫が開設され教学が大いに進み、二万石の小藩ながら天下に誇り得る業績と地名を高くし

た。その後の七〇年はその余勢で明治維新を迎えたものと私は理解する。

最初の一〇〇年は前述したとおり、高政公の鶴屋城築城と城下町の道路・堤防・内堀・外堀・藩士の住居など専らハード面の造成と整備に追われ、新しく海岸部の重要な警備地点数カ所に番所を設置した後は、産業振興のため農地(新田)の開墾をはじめ「百姓の掟」を定め、特に地域の特性である漁業に着目して九九浦の各漁村に振興の制度を定めた。奨励普及することによって藩財政の強化安定を図り、藩民の生活向上に役立てた。

六代高慶は將軍綱吉の側近で、奥小姓として幕府の諸制度・典礼を学んだ好学の藩主であったが、既にその頃から藩士の進歩向上を願う学問所を開設した。

八代高標は天下の学者三大名の一人に数えられ、博識の藩士を書物奉行に任命し、長崎に派遣して購入蒐集した書籍が僅か二〇年の間に八万巻にも達した。しかも当時としては入手困難な貴重本ばかりで、数千金を要したといわれ、そのため藩の財庫が傾いた程だったという。

その書籍は中国・韓国・西洋の舶来書で、オランダ・スペイン・ポルトガルなど当時海外に雄飛した各国のもの

が主で、中国では宋・元・明版の古書も多く、四書五経(史書)・詩文・仏典・生物学・医学・天文学・数学・伝記等あらゆる学問の分野にわたった。また初版本で印刷が綺麗な清朝時代の唐本が大量にあった。

天明元年(一七八一)には既に八万巻に達したので、保管・管理のため三の丸に書庫二棟を建築し、書籍が棟につかえるほど膨大な数量であったという。

これと時を同じくして「四教堂」という藩校を創設した。現在の三余館の場所で大手前に面した道路側で、隣に武芸道場も併設したので、わが佐伯藩は平和な時代にもかかわらず文武両道を目指す藩として有名になった。

四教堂の組織は①総学(校長)に家老、②学監(教頭)に側用人一人、③教授に上・中士二名、④助教(同上)五名他に六〜七名の助手が任命された。入門の藩士・子弟は約三〇〇名で、他藩からの留学生も二〜三〇人ほどいたそうで、その盛観は当時の佐伯藩としてはかつてない出来事で、召し抱えられた有名学者の指導で優れた藩士を輩出し、維新の新政府に知事や参事の要職を得て活躍した人たちもいる。

また高標の時代は前代に引き続いて天変地変が相継ぎ、



佐伯市教育委員会所蔵「佐伯文庫」

地震・津波・洪水・火災など多く、そのため飢饉も数度発生した。その頃幕府は対策として各藩に甘藷の栽培を奨励したので、佐伯藩でも海岸部はもとより山間部でも、食料を補うため競ってその増産に努力したのみか、塩屋村女島の沖の洲を開墾して水田四二町歩の造成に成功した。

また高標夫人の出身地の伊予大洲藩より製紙の技術を導入して切畑・上野・中野・因尾などで農民に製紙の法を講習奨励した。さらに向島の諸木植付所(現神明社附近)に「かじのき」や「はぜ」の苗木を植付け、山間部の村々に配布し「和紙」「精蠟」の生産原料の増産に寄与した。

これらの事業を起こすことにより、財政窮乏と領民生活の困難を救った。高標に引続き九代以降の藩主が四教堂に招へいた学者とその功績、ならびに佐伯文庫のその後の行方と現状、特にわが国幕末の幕閣中枢部の意識改革と、鎖国封建社会の開眼に預かって、強力な影響を及ぼしたことは多大であったと思われる。

### No. 一八 小藩の偉業「佐伯文庫」

ソーラウンドの一〇〇年（高慶・高丘・高標）を全盛時代として、二万石の小藩ながら天下にその存在を認識させ、雄藩でも出来なかつたほどの大事業を完遂して、後世のわが国発展に大きく寄与した。私ども佐伯人の誇れる治績・業績・功績は藩侯を中心にして達成できたものとして理解している。

この時期は徳川幕府も元禄文化の華咲く將軍綱吉から八代將軍吉宗に至る間で、「吉宗が徳川幕府中興の祖」と称されたのも偶然の一致であり、宝永四年（一七〇七）の富士山大噴火や地震・洪水・津波・大火が度重なった上に「イナゴ」の大発生の被害や悪疫流行など全国的に災害が多かった。それが原因となって地域にあつては数度の飢饉



佐伯市教育委員会所蔵「佐伯文庫」

も発生し、各藩も財政逼迫を「年貢の増徴」や「藩士の秩禄切り下げ」などで切り抜けた時代で、平和で戦のない徳川幕府三〇〇年の中の一〇〇年と佐伯藩の一〇〇年は全

く軌を一にしている。

佐伯では英明の藩主を中心に、「よく学び」「よく励み」政治に産業に文化に優れたリーダーを得て、小藩ながら内容の充実した「山椒は小粒でピリツと辛い」存在として天下に認められていたものと想像する。

私はその象徴として八代高標の「佐伯文庫」と「四教堂」を挙げたい。前述のごとく藩政の困難・財政窮乏を乗り越えて、天下に冠たる八万巻の和漢洋の貴重な書籍を蒐集し、その中の二万巻は幕府に献上、幕府直轄の学問所「昌平校」や幕府の図書館ともいふべき「紅葉山文庫」に配置保存され、広くわが国最高の頭脳・知識の源泉となった。その豊かな又数多くの、広い分野に亘った書籍が幕末から維新に至る七〇八年の新知識を吸収するに役立ち、鎖国にもかかわらず海外の情報・知識を網羅できたのに預かって、偉力を発揮したものと思われる。二万石の小藩の仕事としては誇り高き大事業で、大きくわが国の開国や外国理解、海外との貿易・交流に寄与できたものと思う。

好學で天下に名を知られた学者三大名の一人であった高標の「選書眼の優れた点」「その蒐集量の多いこと」「学問の各分野に亘っていること」などで佐伯文庫は、佐伯市

の貴重な文化財として子々孫々に至るまで大切に保存せねばならない。

十代高翰が幕府に献上した二万巻を除き、残りの六万巻は県内を除きその所在を明らかにすることは至難の状況で、その当時すでに散逸の方向をたどっていた。

①高標自身が読むため江戸の藩邸に運んだ。

②四教堂の教授用として廻した。

③家臣の好學者に賜った。

④好學の大名に贈った。

⑤以外は大半を三の丸書庫二棟に保管したが、数多くのものが廢藩置県の際に毛利家の所有を残し大分県に移管された。それらは現在

一、大分図書館に 一一部 四六冊

二、佐伯市教育委員会に 一〇部 一四二冊

三、池彦土蔵の長持三個に 一三三部 二七七八冊

合計 一五四部 二九六六冊

県内に僅かに約三〇〇〇冊を残すのみになっている。

昭和五〇年代のある夏休みシーズンに、大分大学教育学部教授・文学博士渡辺澄夫先生と佐伯駅で偶然お目にかかった（先生は佐伯市教育委員会に委嘱されて「佐伯文庫」

の調査をされていた)。

先生は「池彦の長持から全部取りだして調査しているが、貴重にして現在入手できない珍しい舶来書が沢山ある。このままではシミによつて駄目になるので、今のうちに方法を考えなければ、佐伯市にとつて得難い財産(文化財)を失うことになる。世論を喚起して方策を研究されたら」とアドバイスがあり、私からも当時の市長に先生の提言を伝達したことがあった。

その後、市当局ならびに教育委員会の配慮で、三つの長持の分は一部一〇数冊を洪紙で包み、丁寧に扱われ保存状態もよく、蔵書印も「佐伯文庫」と押され、好學の高標公の面目を今日に残し得たものと関係者の皆様に感謝申し上げたい。

## No. 一九 「四教堂」の開学について

四教堂初代の教授松下筑陰先生の話をする前に、「四教堂」の「四教」とは何を意味するか説明しておく必要がある。「四教」とは朱子学で教えた孔子の『論語』から出た言葉で二つの解釈がある。即ち「文」「行」「忠」「信」でつまり「文を学び、学んだことを行い実践し、徳を身につける」という意味と、『礼記』の「詩」「書」「礼」「楽」などを修養することによつて「仁」の人として尊敬を集め得る人格を養う。つまり「知行合一」を求めることを藩校教学の理想として「四教堂」と命名したとされている。

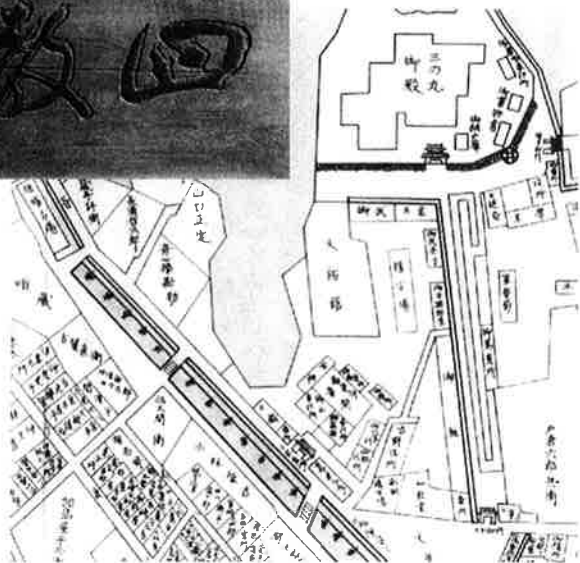
現在の佐伯小学校の正門に「四教堂」の扁額が掲げられているが、これを書いたのは片岡直道という方で、昭和初期に通信省(旧郵政省の前身)の初代航空局長をされた。四教堂教授として有名な高妻芳州先生の後裔で、旧家老職・片岡家(山際通り)の養子になって片岡姓を名乗った。私ども子供時代の佐伯小学校の高妻弘道校長の弟で、学者の血を引くばかりか当時の健筆家でその名を知られていた。陸・海軍の飛行機の時代に民間航空界の草分けとして行政の中心におられ、今日の空の交通の足として民間航空の育ての親であったことは、佐伯の皆様ご存じないと思う。



「四教堂」扁額

「明治四年屋敷図」

- |        |    |
|--------|----|
| 御書物奉行所 | 1棟 |
| 御書物倉   | 2棟 |
| 四教堂    | 1棟 |



私は昭和八年に上京の際、毛利家の紹介で荻窪のお住居と、当時の通信省航空局で片岡直道局長にお目にかかることが出来た。(東大卒で官僚のトップとして敏腕を揮っていた)それも遠い昔の思い出となった。

さて、四教堂初代教授の松下筑陰先生が江戸の有名学者との交友のため、四教堂教授就任後江戸に上がった。先生は学者としても西国では著名で、久留米藩出身にもかかわらず幕府領日田に私塾を開かれ、咸宜園の広瀬淡窓の幼少時代の恩師であつた。その淡窓が一四歳の年に四教堂の筑陰先生を訪ねて佐伯にやってきた。徒歩で熊本県境の杖立・久住・竹田を経て当時の中ノ谷峠で山犬の声を聞きながら、筑院先生の学を慕って四教堂に入学したのである。しかし病弱のため周囲が心配し、僅か「春から夏に至る間」四〜五ヶ月で日田に戻つた。

当時の番匠川(龍川)は満々と清流を湛えていて、月に輝く夜に龍護寺の辺りまで舟遊びした「詩」も残っている。また佐伯の気候風土・自然も素晴らしく魚や農産物も豊富で美味しく、大変恵まれた良い土地であると讃嘆した「詩」も残されている。

佐伯から日田に帰って久留米や福岡方面の有名な学者に学び、後に咸宜園を開設され、西国の各藩の子弟の俊秀がこの咸宜園に何千人も学んで、幕末や維新の偉人や学者が巣立つことになった。わが四教堂歴代の教官も「中島子玉」「高妻芳州」「秋月橋門」等はいずれも淡窓先生の教え子であり、また咸宜園の秀才だった方々である。

さて、音楽を趣味とされ「琵琶」を嗜まれた筑陰先生は江戸に参られた機会に、名工の手になる琵琶を求めべく店に入ると、そこに「慶長四年夏・山室氷夢・森伊勢守の需に应じて作る」と琵琶の胴裏に銘があつた。森伊勢守は藩祖毛利高政の旧名であることを筑陰先生は承知していたので、驚いてそれを買ひ求め佐伯へ持ち帰つた。

即ち高政公生前に愛用した琵琶が江戸藩邸にあつて、没後（寛永五年芝東禅寺葬）誰かの手に渡つて転々と持ち主が変わつた後に、偶々筑陰先生の目にとまり二〇〇年ぶりに高政公の故里佐伯に帰つて来たのである。

先生は黙つてこの名器を秘蔵するつもりであつたが、誰から伝わつたのか藩主高標公の耳に入った。そこで藩公から「高政公の遺品」として是非譲つてもらいたいと再三の

要請があつた。仲々返事がないので、高標はたまりかねて新しい琵琶を京都で買ひ求め、代わりの品として筑陰先生に送り、ようやく承知してもらつたという。

この琵琶が作られた慶長四年は高政にとつても色々問題の多い年で、文禄の役後の終戦処理に悩まされた頃であつた。高政は文禄元年（一五九二）から朝鮮の役に従軍、同三年日田に封ぜられ、七年間を戦いで明け暮れた後、秀吉没後の慶長四年（一五九九）ようやく日田に帰ることが出来た。

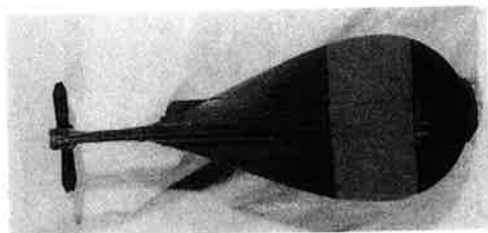
豊臣から徳川に政権交代する天下分け目の「関ヶ原合戦」の前年のことである。高政は秀吉亡き後の身の振り方について色々悩んでいたものと想像されるが、琵琶を当時の名工に頼んで持ち帰つたことは間違いない事実で、血生臭い戦国武将が琵琶を注文して藩地に持ち帰つた心境をうかがい知ることが出来る。

大筒で「伊勢流」という流派をうち立てるほど「凝り性」の高政は、恐らく築城後の城山で琵琶をかき鳴らす日が多く、砲術に劣らぬ名手になつていたと思われる。晩婚の高政に嫁いだ夫人の話では、高政が好んで弾いた曲は『平家物語』の「壇ノ浦合戦」平家滅亡の段であつたという。彼

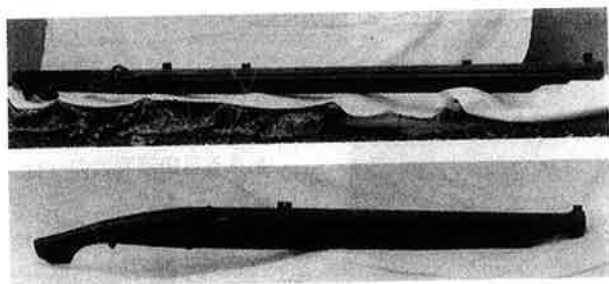
を最も愛し立身出世の場を与えてくれた主君秀吉が僅か二代で滅び、徳川幕府の時代を迎え常に戦々恐々、保身を忘れることのない日々を琵琶で紛らわし慰め得たものと思われる。

琵琶に熱中している時の高政の目つきや表情は、琵琶の音色と共に誠に淋しそうで悲しそうであつたと、後々の世に夫人が述懐していたという。築城の際は「一日三人切り捨てた」という気短で鬼神も避けるような強気の武将が、反面このように人情の機微を知り、喜怒哀楽の虜となり、親孝行の上に常に藩民を慈しむ人情家に変身したことを知り、高政と琵琶との関係を教えられた。

私はその琵琶を、確か市制三〇周年と文化会館落成記念に、高政の遺品を市役所の二階に展示された時に拝見した。今は毛利家から預かり、文化会館か図書館に梱包されたまま眠っていると思う。この歴史を物語る逸品の数々を後世の我々市民をはじめ、外部からの観光客に観光資源として何故有効利用しないのか、理解に苦しむ次第である。



高政愛用の琵琶



高政愛用の大筒 四海波（上）と雲龍（下）